双方向遠隔教育による グローバルリーダー育成プログラムの効果

－オンライン短期留学の課題と可能性－

巽　　洋 子*
岩 城　奈 巳**

＜要　旨＞

名古屋大学国際教育交流センターでは 2021 年度より海外渡航による短期留学の代替として海外協定大学のオンラインプログラム提供を取り入れた。本稿では双方向遠隔教育によるグローバルリーダー育成をねらいとしたオーストラリア・モナシュカレッジのプログラム「Global Communication for Future Leaders」について、参加した名古屋大学生・大学院生計 17 名を対象とした意識調査結果をもとにプログラムの教育効果を検証し、その成果と課題を報告する。「語学力の向上」を求めてプログラム参加を志望する学生が多かったが、修了後には「視野を広げること」と「参加学生との交流」に満足を感じていることが分かった。また当初「現地の文化を体験すること」は学生から期待されていなかったが、修了後には「オーストラリア社会」や「オーストラリア文化」への興味の度合いが伸びており、オンライン留学でも現地の社会・文化への興味を引き出すことが可能であることが明らかになった。プログラムを通したキャリア意識の発達は確認できたが、社会人としての自立を目指すキャリア教育としての有効性は低いことが分かった。振りかえりでは、学生全員が英語でのコミュニケーション能力、文化理解、積極性やチャレンジ精神などグローバル人材に求められる素養について、その重要性を認識していることが明らかとなった。

1. はじめに

新型コロナウィルス感染症（COVID-19）蔓延により、大学はコロナ禍でも学生の学びをとめない教育実践が求められている。オンラインを活用し

*名古屋大学国際機構国際教育交流センター・特任助教
**名古屋大学国際機構国際教育交流センター・教授

た双方向もしくはオンデマンドによる授業は広く浸透してきており（Witze 2020）、日本国内でも、オンラインを活用した授業や、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の教育実践は、もはや珍しいものではなくなった。大学教育のオンライン化に関する研究も進み、知識習得型のオンライン授業に対しては学生が一定の評価をしていること（山内 2021）や、大学教育として授業外での学びについても可視化が重要であること（田口・鈴木 2021）などが明らかになっている。

しかし未だに海外との往来が困難な状況は、学生の海外派遣・受入れに大きな影響を及ぼしており、留学、国際理解教育、国際交流の分野では、渡航を伴わない新しいスタイルで学生に学習・経験の機会を提供することについて模索が続けられている。2020 年度前期に遠隔授業におけるグローバル体験での満足度の高さが明らかになった大学では、後期から海外実習のオンライン代替コースを作ったという実践例がある（宮武 2021）。先駆的に実践したオンライン留学の効果を BEVI（The Beliefs, Events, and Values Inventory）で測定すると、「社会文化的オープン性」には効果がみられたが、「他者理解」や「自己認識」の涵養にはバーチャル空間で行うプログラムとしての課題がみえた（清藤・橋本 2020）という先行研究もある。

筆者の所属する名古屋大学国際教育交流センターでは 2019 年度まで多くの学生を長期・短期に関わらず海外の協定大学へ派遣してきた。2020 年度は新型コロナウィルス感染症の影響を鑑みて全ての学生派遣を中止し、協定大学が提供するオンライン留学プログラムを紹介した。本稿で扱うオーストラリアのモナシュ大学は本学の協定大学の 1 つで、新型コロナウィルス感染症流行以前は毎年 20 名程度の学生が渡航して留学を経験していた。2020 年度はモナシュカレッジ[1)]がオンライン短期留学プログラムを開発したため本学の学生への紹介を行ったが、プログラムに参加した学生は年間を通して 3 名という実態であった。2020 年 7 月に留学に興味を抱いている学生 211 名を対象に新型コロナウィルス感染症による学生の留学への意識変容について調査した際、オンライン留学は語学力やディスカッション能力の向上の面では支持されたものの、実際に渡航する留学とは得られるものが異なると回答した学生が大半であった。また国内で留学生と共に対面で学ぶ授業については評価が高く、学生はオンライン授業よりも対面での交流を希望していることも明らかになった（岩城・巽 2021）。そこで 2021 年度、国際教育交流センターではこれらの学生の意見・要望をふまえ、国内にて対面で留学生と SDGs を学ぶ共修プログラム、語学力やディスカ

ッション能力を集中的に高める国内合宿プログラムを企画した。多くの学生から申込がありその需要は明らかであったが、国内での新型コロナウィルス感染症の蔓延が収束しなかったためプログラムは中止せざるを得なかった。結果的に 2021 年度の春学期（夏休み）に実施できたのは、海外協定大学が提供するオンライン留学プログラムのみとなった。

本稿では、2021 年度前期にオーストラリア・モナシュカレッジが提供するグローバルリーダー育成をねらいとした 3 週間の双方向遠隔教育プログラム「Global Communication for Future Leaders」に参加した名古屋大学生 15 名・大学院生 2 名（計 17 名）を対象に、意識調査結果をもとに当プログラムの成果と課題を報告する。本学生が渡航や対面交流を望んでいる実態が明らかになっている（岩城・巽 2021）状況下で、当プログラムに申込んだ学生はどのようなことに期待して参加を決めたのか。当プログラムは学生個々のどのような興味関心を引き出し、どのような力や素養を伸ばしたのか。これらの問いに対して、プログラムの志望動機と満足度（本稿 4.1）、学生の興味がある領域の変容（4.2）、キャリア意識の発達（4.3）、学生自身による研修成果の振りかえり（4.4）の調査結果をもとに、英語でのコミュニケーション能力の育成（5.1）、視野を広げること（5.2）、文化理解（5.3）、キャリア意識の発達（5.4）、グローバル人材に求められる素養（5.5）の観点でプログラムの成果と課題を考察し、オンライン短期留学の可能性について検証したい。

2. プログラムの概要

2.1 プログラム：「Global Communication for Future Leaders」

研修先はオーストラリアのモナシュカレッジで、ディスカッション、ロールプレイ、プレゼンテーションなど参加型の授業と、ワークショップやモナシュ大学生との国際交流など授業外のアクティビティ全てがオンラインにより提供された。参加学生は日本・韓国・中国からの大学生・大学院生であり、様々な大学から参加する学生との混合クラスであった。授業には Intermediate と Advanced の 2 レベルがあり、それぞれに語学要件が定められており、学習内容も異なる（附属資料 1）。研修日程は 2021 年度の夏休みで Entry 1：8 月 2 日（月）～ 8 月 20 日（金）、Entry 2：8 月 9 日（月）～ 8 月 27 日（金）、Entry 3：8 月 16 日（月）～ 9 月 3 日（金）のいずれかから選択が可能であった。本学の学生は、大学院生 2 名が Entry1 の期間、学部生 15 名が Entry 2 の期間に参加した。総授業時数は 60 時間（1

日 4 時間）であった。なお、モナシュカレッジ主催の「Global Communication for Future Leaders」は 2021 年度に初めて提供されたプログラムではあるが、2020 年度に開発されたモナシュカレッジのオンライン研修「English and Global Careers Program」がベースになっている。

2.2　教育目標

モナシュカレッジの「Global Communication for Future Leaders」と名古屋大学での事前・事後授業を合わせて、全学教養科目（2021 年度春学期特別講義 アジア現代事情Ⅰ）2 単位の単位認定をおこなった。当科目の教育目標は「シティズンシップを育むトピックで物事を多角的・多面的に捉えられるスキルを伸ばし、英語でのコミュニケーション能力を高めることで、将来グローバル人材として活躍する際に必要とされる力を身に付けること」である。具体的には 3 つの要素（要素Ⅰ：語学力、コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー）の育成を目指すことをねらいとした。また当科目の履修学生が、受講後には海外渡航を伴う交換留学（半年～1 年間）、海外大学院進学など次のステップを検討・実施するための学習経験になるよう位置付け、履修学生の留学プランに関する個別相談にも対応した。

3.　調査概要

3.1　調査対象学生の基本情報

モナシュカレッジが提供する留学プログラム「Global Communication for Future Leaders」に参加した計 17 名の学生の構成は、学部 1 年生が 9 名（文学部 3 名、法学部 1 名、経済学部 4 名、医学部 1 年生）で半数を占め、学部 2 年生 3 名（文学部 2 名、法学部 1 名）、学部 3 年生 3 名（情報学部 2 名、医学部 1 名）を加えた計 15 名が全学教養科目「特別講義 アジア現代事情Ⅰ」の単位履修を申請している。大学院生は、修士課程 2 年生の 2 名（理学研究科、工学研究科）が、単位履修の対象外ではあるが当プログラムに参加をした。本稿では対象学生 17 名を学生 A～学生 Q とし、プログラムの成果と課題を考察しやすいよう学年順（学生 A～学生 I：学部 1 年、学生 J～学生 L：学部 2 年、学生 M～学生 O：学部 3 年、学生 P～学生 Q：大学院生）にアルファベットを振っている。

3.2　質問項目・回答方法

プログラム開始前と修了後にアンケート調査を実施した。プログラム開始前アンケートでは、pQ1 海外研修プログラムに求めること、pQ2 語学や文化など各領域について興味の有無、pQ3 キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（CAVT）、pQ4 将来の海外滞在希望について尋ねた。プログラム修了後アンケートでは、プログラム前後の意識変化を確認するために、プログラム開始前と同様の項目（fQ1 当プログラムで最も満足の高かったこと、fQ2 語学や文化など各領域について興味の有無、fQ3 キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（CAVT）、fQ4 将来の海外滞在希望）を質問し、加えて fQ5 プログラムに参加した成果に関する自己認識についても確認した（各質問項目と回答方法は、附属資料 2 参照）。

4. 調査結果

4.1　プログラムへの志望動機と満足度

「Global Communication for Future Leaders」に申込んだ学生は、当プログラムに何を期待し、実際に参加してどこに満足度を感じたのかを探るため、プログラム開始前・修了後の【Q1】について回答結果を紹介し、考察する。

【pQ1-1】「あなたが海外研修プログラム全般に求めることは何ですか（複数選択可）」という質問に対し、17 名全員が「語学力の向上」を選択した。次点で、「視野を広げること」14 名、「参加学生との交流」13 名、「現地の文化を体験すること」11 名と続き、「専門知識を深めること」4 名、「その他」1 名（積極性、主体性の向上）という結果であった。どの学生も海外研修プログラムでは語学力を向上させたいと考えていることが明らかとなった。長期の交換留学において主目的である専門的な学術知識を深めることについては、今回の短期プログラム参加者の 1/3 の学生しか要望していないことが分かった。

続いて、プログラム開始前の質問【pQ1-2】「Global Communication for Future Leaders」に参加するにあたり最も優先度が高かった項目と、プログラム終了後の質問【fQ1】当プログラムに参加して最も満足度が高かった項目についての回答を比較する。「Global Communication for Future Leaders」に最も期待する項目として「語学力の向上」を挙げた学生は 10 名で最多であった。海外研修で語学力を挙げたいと考えている学生が、オンラインという形態でも「語学力の向上」を望んで参加していることが分

かる。とくに学部２年生以上では８名中７人が「語学力の向上」を目指して申し込んでいることが判明した。「参加学生との交流」と「視野を広げること」と回答した学生はどちらも３名で、１名が「その他（積極性と主体性の向上）」と回答している。プログラム終了後のアンケートでは、「Global Communication for Future Leaders」で最も満足した項目として「語学力の向上」を挙げた学生は５名であった。「視野を広げること」と回答した学生が６名で最多、「参加学生との交流」と回答した学生も５名で、１名が「その他（積極性や挑戦する力が鍛えられたこと）」と回答している。個別で見ていくと、「語学力の向上」を期待してプログラムに参加した学生 10 名のうち７名が語学力ではない部分に満足感を得ていることが分かる。この結果から、プログラムへの当初の期待と満足した項目は直結しなかったと言う事ができるだろう。なお当プログラムのねらいは「語学力の向上」ではなく「物事を多角的・多面的に捉えられるスキルを伸ばし、英語でのコミュニケーション能力を高めること」にあったため、語学研修とは異なる当プログラムの特徴が学生の満足感に影響したとも考えられる。

表１　当プログラムに最も期待する項目と満足した項目の比較

	プログラムに期待すること	プログラムで満足したこと
学生 A	その他（積極性、主体性の向上）	視野を広げること
学生 B	視野を広げること	参加学生との交流
学生 C	参加学生との交流	語学力の向上
学生 D	語学力の向上	参加学生との交流
学生 E	参加学生との交流	その他（積極性や挑戦する力が鍛えられたこと）
学生 F	語学力の向上	視野を広げること
学生 G	視野を広げること	視野を広げること
学生 H	語学力の向上	視野を広げること
学生 I	参加学生との交流	参加学生との交流
学生 J	語学力の向上	視野を広げること
学生 K	語学力の向上	語学力の向上
学生 L	語学力の向上	語学力の向上
学生 M	語学力の向上	視野を広げること
学生 N	語学力の向上	参加学生との交流
学生 O	語学力の向上	参加学生との交流
学生 P	語学力の向上	語学力の向上
学生 Q	視野を広げること	語学力の向上

出所：筆者作成

4.2　学生の興味がある領域の変容

続いて、参加学生が当プログラムに関わる各事項（「グローバルキャリア」「就職」「国際交流」「異文化コミュニケーション」「オーストラリア社会」「オーストラリア文化」「外国語」「海外生活」）の何に興味を抱いており、プログラムへの参加を通してその興味はどのように変化したのかをプログラム開始前・修了後の【Q2】で確認した。なおアンケートで項目を設けた「企業戦略」については実際のプログラム内で扱うことがなかったため本稿では省略する。表２に、各項目への回答選択肢（とても興味がある／興味がある／どちらとも言えない／あまり興味がない／全く興味がない）と回答学生数の推移を、プログラム開始前の人数、矢印（増加:↗、減少:↘）、プログラム終了後の人数として記す（ただし回答学生数に変化がなかった項目については人数のみ記す）。

プログラム前後を比較すると、全体的に「どちらとも言えない」の回答者数が減少し「興味がある」との回答に、また「興味がある」との回答が「とても興味がある」との回答へと動いていることから、当プログラムでの学習を通して各事項への学生の興味が増していると言える。項目別に見ていくと、4.1「プログラムへの志望動機と満足度」の調査で、「現地の文化を体験すること」を海外研修プログラム全般に求める学生は一定数いたものの、当プログラムに最も期待すると回答した学生は１名もいなかった。しかしプログラム開始前に「オーストラリア社会」「オーストラリア文化」について「どちらとも言えない」と回答していた学生も、プログラム終了後には興味を抱いており、「オーストラリア社会」については計８名、「オーストラリア文化」については計５名の興味の度合いがプログラムを通じて伸びていた。オンライン留学でも、現地の社会・文化への興味を学生から引き出すことができると言うことができるだろう。「グローバルキャリア」について興味の度合いを伸ばした５名は、学部1、2年生であった。一方で「就職」の回答者数には大きな変化がないが、個別に回答を見ていくと学部３年生と大学院生の興味の度合いが伸び、学部１年生の興味の度合いが下がっていた。当プログラムでビジネスシーンを題材とした授業が展開されたことにより、具体的に就職をイメージできた上級生と、グローバルキャリア自体に興味は持てたが就職にまでは繋がらない下級生というように、所属学年で差が生じたことが伺える。

表２　【Q2】各項目に興味があると回答した学生数の変容（単位：人）

	とても興味がある	興味がある	どちらとも言えない	あまり興味がない	全く興味がない
グローバルキャリア	7 ↗ 12	8 ↘ 4	2 ↘ 1	0	0
就職	7 ↗ 8	8 ↘ 7	1	1	0
国際交流	14 ↗ 16	3 ↘ 1	0	0	0
異文化コミュニケーション	15 ↗ 16	2 ↘ 1	0	0	0
オーストラリア社会	3 ↗ 6	8 ↗ 10	6 ↘ 1	0	0
オーストラリア文化	5 ↗ 7	8 ↗ 9	4 ↘ 1	0	0
外国語	10 ↗ 13	7 ↘ 3	0 ↗ 1	0	0
海外生活	14 ↘ 13	3	0 ↗ 1	0	0

出所：筆者作成

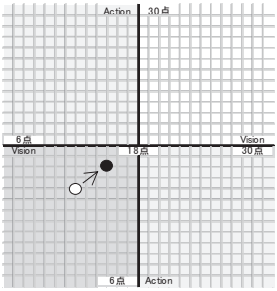
4.3　キャリア意識の発達

将来グローバル人材として活躍する際に必要とされる力を身に付けることをねらいとした当プログラムでの学習を経て、学生のキャリア意識には変容があったのか否かを確認するため、キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT」（以下CAVT）を導入して検証を行った。CAVT は法政大学が開発したもので、大学生の就職活動で必要な力をアクションとビジョンの２つの側面から捉えるテストである。アクションは将来に向けて、どのくらい熱心に積極的に行動しているかを測定する項目群で、ビジョンは、将来に向けたビジョンや夢、やりたいことをどのくらい明確にしているか、またそれに向けて準備しているかを測定する項目群である（下村・八幡・梅崎・田澤2009）。質問 12 項目のうち、奇数（1、3、5、7、9、11）番目がビジョンに関する項目で、偶数（2、4、6、8、10、12）番目がアクションに関する項目である。5 件法で質問され、それぞれに 1 点から 5 点を与えて数値化している。ビジョン項目、アクション項目の点数をそれぞれ足し合わせたものが、ビジョン得点、アクション得点となる。図 1 において、プロットシート座標軸の縦がアクション項目、横がビジョン項目で、座標の上ほどアクション得点が高く、右ほどビジョン得点が高い。回答結果を、プロ

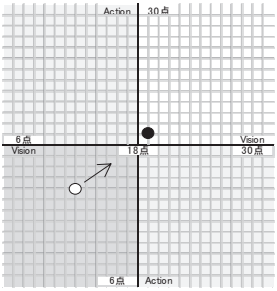
グラム開始前を○印、プログラム修了後を●印として、キャリア意識の変化を矢印で示した。プロットシートの右上ゾーンはキャリア形成に向けて積極的に活動しており将来に対する展望も明確、左上ゾーンと右下ゾーンはキャリア形成に向けた活動または将来に対する展望のどちらかは高い、左下ゾーンはキャリア形成に向けて積極的に活動を始め、将来に対する展望を明確にすることが重要（下村・八幡・梅崎・田澤 2009）と解釈することが可能である。

プログラム開始前・修了後の【Q3】CAVT 結果によると、学部 1 年生は全体的にビジョン項目でもアクション項目でも伸びが見られた。学部 1 年生の半数はビジョンとアクション双方の数値を伸ばしている。なお、学生 H はプログラム開始前の CAVT で全項目最高点と回答しているため、プログラムを通した変化を観察するには信憑性のないデータであると判断する。学部 2、3 年生の CAVT 結果では 1 年生程の伸びはなく、プログラムを経たアクション数値の下降も見られる。就職が既に内定している大学院生の数値はプログラム前の時点で既に高かったが、プログラム修了後には彼らのビジョン・アクションともに揺るぎないものになったことが確認できた。「Global Communication for Future Leaders」の授業では、ビジネスシーンにおける英語コミュニケーションを学び、課外アクティビティでは世界で活躍する人材の紹介として在オーストラリア日本大使館の副領事による講演会も実施した。あまり大きな変化ではないが、当プログラムは学生のキャリア意識にも影響を与えたことが明らかとなった。

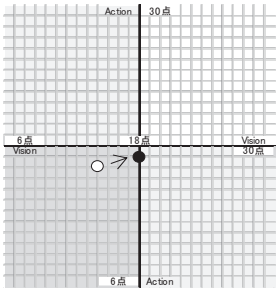
学生 A（U1）



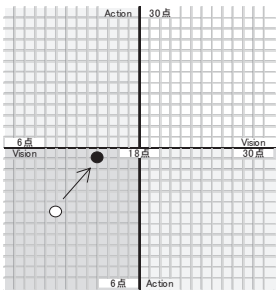
学生 B（U1）



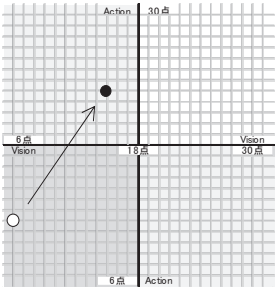
学生 C（U1）



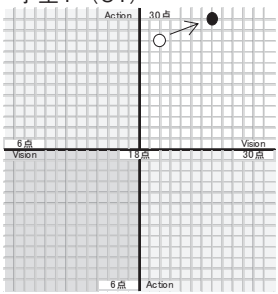
学生 D（U1）



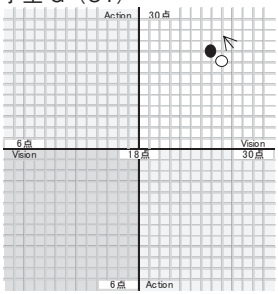
学生 E（U1）



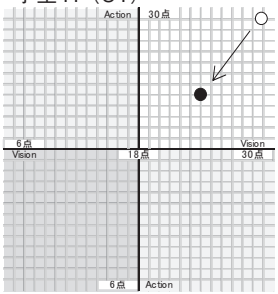
学生 F（U1）



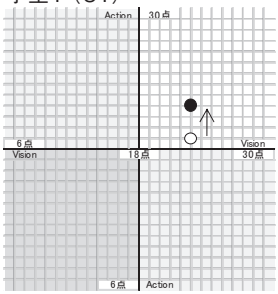
学生 G（U1）



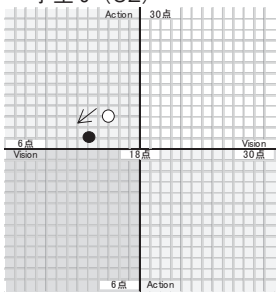
学生 H（U1）

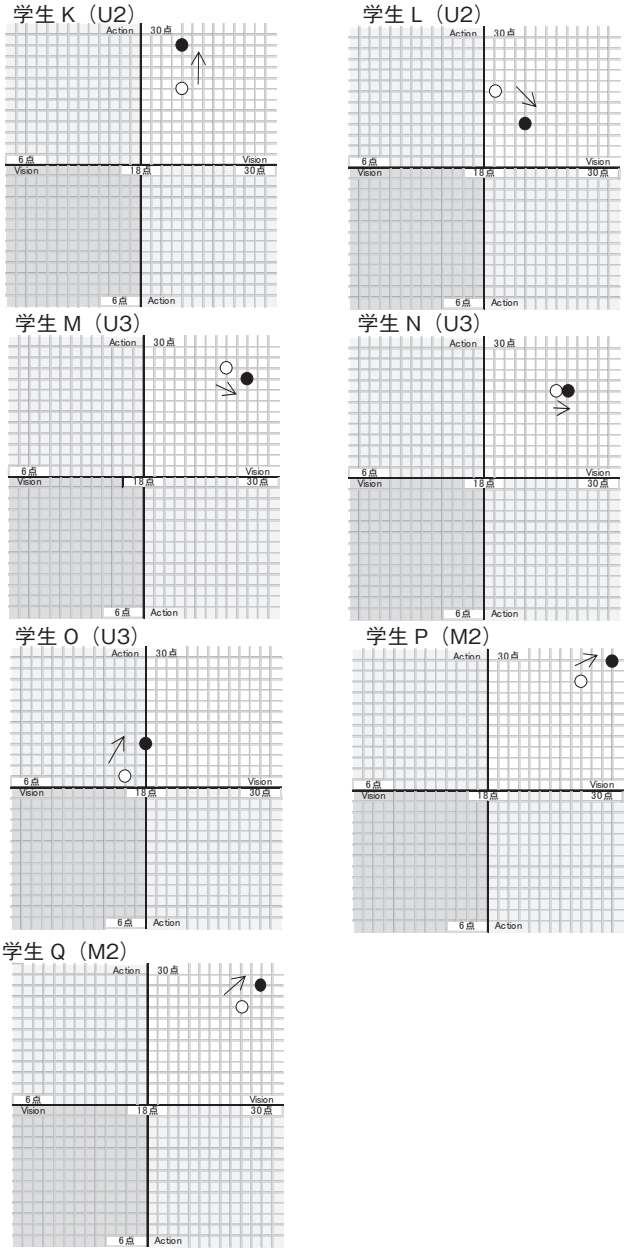


学生 I（U1）



学生 J（U2）





出所：筆者作成

図 1　CAVT 結果プロットシート

4.4　学生自身による研修成果の振りかえり

最後に、学生自身が研修成果を振りかえったアンケート結果をみていく。プログラム修了後のアンケート【fQ5】で、17 名全員が「強くそう思う」と回答したのは「⑬ チャレンジ精神が重要であると感じた」であった。「⑤海外を舞台に活躍したいと感じた」「⑨ 英語でコミュニケーションを取る楽しさを実感した」「⑩ もっと語学を勉強する必要があると感じた」「⑪ 異文化に触れ、視野が広がった」「⑫ 積極性が重要であると感じた」「⑭ 精神的にタフであることが重要であると感じた」「⑮ リーダーシップが重要であると感じた」「⑯ 幅広い教養が必要であると感じた」「⑰ 自分の母国の歴史や文化について、きちんと理解することが重要であると感じた」の各項目においても、全員が「強くそう思う」「ややそう思う」の肯定的な回答をしている。幅広い教養（⑯）に加え、当プログラムのねらいであるグローバルリーダー育成と関連が深い項目について、語学力（⑨、⑩）、文化理解（⑪、⑰）、グローバル人材に求められる素養（⑫、⑬、⑭、⑮）の重要性を、学生自身がプログラムを通して認識したことが明らかになった。本科目の教育目標「物事を多角的・多面的に捉えられるスキルを伸ばし、英語でのコミュニケーション能力を高め、将来グローバル人材として活躍する際に必要とされる力を身に付ける」は達成されたと評価することができるだろう。

一方で数値の低かったものは、就労に関わる項目であった。「④ 社会人として働くことへの不安がなくなった。」については、「あまり思わない」の回答者が 15 名と最多であった。また「③ 社会人としての心構えを学ぶことができた」「⑦ 社会人と学生との考え方の違いを実感できた。」の 2 項目についても 8 名が否定的な回答をしており、社会人になるための準備としての教育効果は当プログラムにはなかったと言える。プログラム内で、ビジネス場面を想定した英語でのやり取りを練習したり、大使館や国連での仕事について話を聴いたりする機会はあったのだが、社会人としての自立を目指すキャリア教育という観点でみると効果的なプログラムであったとは判断できないだろう。

表３　【Q5】学生自身による研修成果の振りかえり

	強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
① 今まで関心がなかった職種に興味が沸いてきた				
	3名	9名	4名	1名
② 今後の就職活動に対する意欲が沸いた				
	2名	13名	2名	0名
③ 社会人としての心構えを学ぶことができた				
	1名	8名	8名	0名
④ 社会人として働くことへの不安がなくなった				
	1名	1名	15名	0名
⑤ 海外を舞台に活躍したいと感じた				
	9名	8名	0名	0名
⑥ 海外で働くことの難しさを実感した				
	6名	10名	1名	0名
⑦ 社会人と学生との考え方の違いを実感できた				
	1名	8名	8名	0名
⑧ 自分自身の強みや弱みを知ることができた				
	9名	6名	2名	0名
⑨ 英語でコミュニケーションを取る楽しさを実感した				
	16名	1名	0名	0名
⑩ もっと語学を勉強する必要があると感じた				
	15名	2名	0名	0名
⑪ 異文化に触れ、視野が広がった				
	12名	5名	0名	0名
⑫ 積極性が重要であると感じた				
	16名	1名	0名	0名
⑬ チャレンジ精神が重要であると感じた				
	17名	0名	0名	0名
⑭ 精神的にタフであることが重要であると感じた				
	14名	3名	0名	0名
⑮ リーダーシップが重要であると感じた				
	7名	10名	0名	0名
⑯ 幅広い教養が必要であると感じた				
	11名	6名	0名	0名
⑰ 自分の母国の歴史や文化について、きちんと理解することが重要であると感じた				
	15名	2名	0名	0名

出所：筆者作成

5. 考察

5.1 英語でのコミュニケーション能力の育成

本学の学生が渡航や対面交流を望んでいる実態が明らかになっている（岩城・巽 2021）状況下で、当プログラムに申込んだ学生は「語学力の向上」に期待して参加を決めたことが分かった。特に学部 2 年生以上の上級生は「語学力の向上」を求めて参加した傾向があったが、プログラム修了後のアンケート結果では「視野を広げること」「参加学生との交流」で最も満足感を得たと回答する学生が大半であった。プログラム前後で語学力テストを実施していないので学生の語学力が当プログラムでどこまで伸びたのかは不明であるが、修了後のアンケート【fQ5】で、「⑨ 英語でコミュニケーションを取る楽しさを実感した」「⑩ もっと語学を勉強する必要があると感じた」という質問に対して全員が肯定的な回答をしていることから、英語でのコミュニケーション能力の育成という面で当プログラムは効果的であったと言うことができるだろう。

プログラム修了後のアンケート【fQ1】結果では、「参加学生との交流」についての満足度も高かった。Global Communication for Future Leaders は、日中韓の大学生の混合クラスであり、日本の他大学の学生もクラスメートとして共に学んでいた。また課外アクティビティでは、モナシュ大学の学生とペアになって Language Exchange をしたり、モナシュ大学の学生と一緒に料理、スポーツ観戦、ヨガ、ゲーム等を楽しんだりする時間も設けられていた。遠隔地の学生とも双方向コミュニケーションが実現可能であった要因として、日本、中国、韓国、オーストラリアの時差が極めて少ないことが挙げられる。国や地域は限定されてしまうものの、参加学生同士の交流や現地大学生との交流に関しても、双方向遠隔教育で担える部分があることが分かったため、ポストコロナ時代の留学をデザインする上で参考にしていきたい。

5.2 視野を広げること

プログラム修了後のアンケート【fQ1】結果では「Global Communication for Future Leaders」に参加して最も満足したこととして「視野を広げること」を挙げた学生が多かった。このことは、【fQ5】「⑪ 異文化に触れ、視野が広がった」という項目への全員の肯定的な回答にも裏付けられている。国内からグローバルな視野への拡大、学生視点から社会人視点への視野の

拡大など様々な解釈ができるが、今回の調査【Q2】【fQ5】の結果も踏まえると前者グローバルな視点の獲得という意味で学生は回答したと考えられる。教育目標として掲げていた「物事を多角的・多面的に捉えられるスキルを伸ばす」ということについて、当プログラムでも一定の成果があったと言えるのではないだろうか。

本学では全学教育科目（2021 年度春学期 特別講義 アジア現代事情Ⅰ）の事前授業で多文化理解に関する講義を実施し、「Global Communication for Future Leaders」に参加した実体験から日本とオーストラリアの社会文化を比較し課題レポートを書くよう指示していた。本学のオンライン授業とモナシュカレッジの授業を比較しているレポートもあり、本学は Teacher-Centered Education であるがモナシュカレッジは Student-Centered Education であったという分析、積極的な発言が評価される環境で学べて刺激を受けたという感想、双方向遠隔教育で使用するツール（チャットボックス、ミュート機能、ブレイクアウトルーム、ムードル等）の使用方法の違いなどが記されており、皆がモナシュカレッジの授業を受けることができて良かったと締めくくっていた。先行研究にて「オンライン授業」を受けるより「渡航する留学」や「国内での留学生との共修」を望むとの回答が多かった（岩城・巽 2021）理由は、オンライン留学を経験したことがない学生にとっての「オンライン授業」とは「日本の（本学の）オンライン授業」であるため、海外大学での授業がイメージできなかったことに起因していた可能性も考えられる。学生は「オンライン授業」の捉え方においてもグローバルな視野を獲得したと言えるだろう。

5.3　文化理解

学生 M は、プログラム開始前アンケート【pQ1-3】自由記述で、『本当は現地の文化の体験をすることが一番好きだが、今回の研修ではそれを求めていない。』と断言していた。【pQ1-1】海外研修プログラム全般に求めることとして「現地の文化を体験すること」を選択した学生は 11 名で半数以上の学生は渡航する研修については現地文化の体験を期待していたが、当オンラインプログラム「Global Communication for Future Leaders」に現地文化の体験を求める学生は居なかった。しかし今回の調査によって、オーストラリアの文化や社会に関する学生の興味が、当プログラムでの学習体験を通して引き出されていることが明らかとなった。【Q2】回答で、「オーストラリア社会」について計 8 名、「オーストラリア文化」については計 5

名の興味の度合いがプログラムを通じて伸びていたことに加え、プログラム修了後のアンケート【fQ5】で「⑪異文化に触れ、視野が広がった」という項目への全員の肯定的な回答にも裏付けられている。また【fQ5】「⑰自分の母国の歴史や文化について、きちんと理解することが重要であると感じた」にも 17 名全員が肯定的な回答をしており、異文化理解だけでなく自文化理解の重要性についても認識できていることは、当プログラムの成果として評価できるだろう。

日本とオーストラリアの社会文化を比較する課題レポートで、自然災害、多様性、SDGs といった地球規模の課題をテーマにした学生は、「Global Communication for Future Leaders」で学んだオーストラリア事情に加えて日本の状況も自ら調査し、探究をしていた。また、大学の教育手法、学生生活といった参加学生にとって身近なテーマで日豪を比較し、現地留学をイメージしている学生も多かった。異文化・自文化を理解しようとする姿勢は学生のレポートの随所に表れており、渡航できない状況下でもオーストラリアの文化・社会を深く学ぼうとする学生の意欲が、興味を引き出し、文化理解の重要性を認識する結果に繋がったのだと考えられる。今後、渡航を伴う短期留学をデザインする場合にも、事前学習として双方向遠隔教育の有効活用を検討する価値はあるだろう。

5.4　キャリア意識の発達

キャリア教育の効果を図る際に用いられている「キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT」を導入し検証した結果によると、学部 1 年生は全体的にビジョンとアクション両項目での伸びがあり、キャリア意識の発達が確認できた。学部 2、3 年生の CAVT 結果は、プログラムを経てアクションの数値の下降が見られた。ビジョンは維持できているものの行動については自己評価が厳しくなった結果であると考えられる。「グローバルキャリア」への興味の度合いは学部 1、2 年生で伸びており、一方で「就職」への興味の度合いは、上級生では伸びているものの、学部 1 年生では下がっていた。具体的に就職をイメージできた上級生と、グローバルキャリア自体に興味は持てたが就職にまでは繋がらない下級生というように、所属学年で差が生じたことが伺える。当調査での対象人数がそもそも少なく、またキャリア意識の発達度合いは個人差もあるため、何年生ではどのような変化があると言及することは出来ないが、少なくとも当プログラムが学生のキャリア意識に影響を

及ぼしていることは確認できた。プログラム修了後の【fQ5】回答で、「④社会人として働くことへの不安がなくなった。」という項目には「あまりそう思わない」との回答者が15名もおり、「③社会人としての心構えを学ぶことができた」「⑦社会人と学生との考え方の違いを実感できた。」の2項目についても半数弱が否定的な回答をしていたため、社会人になるための準備としての教育効果は当プログラムにはなかったと言えるだろう。

5.5　グローバル人材に求められる素養

将来グローバル人材として活躍する際に必要とされる力として、3 つの要素（要素Ⅰ：語学力、コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー）が挙げられる（文部科学省 2011）。当プログラムでもこれらの要素の習得を教育目標として掲げており、要素Ⅰの語学力、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーに関するプログラムの成果は先に述べた通りである。要素Ⅱの素養については、プログラム修了後のアンケート【fQ5】の「⑬チャレンジ精神が重要であると感じた」に17名全員が「強くそう思う」と回答しており、「⑫積極性が重要であると感じた」「⑭精神的にタフであることが重要であると感じた」「⑮リーダーシップが重要であると感じた」の各項目においても、全員が肯定的な回答をしていることから、学生自身が当プログラムを通してグローバル人材に必要な要素Ⅱの重要性を認識していることが分かる。下級生のグローバルキャリアへの興味度合いの向上や、学部2、3年生のCAVTアクション項目への自己評価の低下といったキャリア意識に関する影響も、グローバル人材に必要とされる要素を学生自身がプログラムを経て強く意識するようになった結果とも解釈しうるだろう。

また、本科目は海外渡航を伴う交換留学（半年～1 年間）や海外大学院進学など次のステップを検討・実施するための学習経験になるようにと位置付けていた。本学の渡航を伴う短期研修に参加した学生の追跡調査で、短期留学の経験は効果的に交換留学に結び付くことが明らかになった（岩城 2012）ため、オンライン短期留学においても効果をもち得る可能性があると考え授業デザインしたためである。【Q4】将来の海外滞在の希望について、「将来的に海外勤務を視野に入れたい」学生はプログラムを通して11名から13名へと増加、「海外大学院進学を視野に入れたい」学生はプログラム前後変わらず5名、「交換留学に興味あり」と答えた学生は12名から

14 名に増加した。今後の海外滞在を希望しない学生は 1 名もおらず、次のステップへの位置付けとしてオンライン短期留学を活用することも可能であると言えるだろう。

6. おわりに

本稿では、双方向遠隔教育として実施した「Global Communication for Future Leaders」プログラムの効果を 4 種類の意識調査（プログラムの志望動機と満足度、学生の興味がある領域の変容、キャリア意識の発達、学生自身による研修成果の振りかえり）によって検証し、英語でのコミュニケーション能力の育成、視野を広げること、文化理解、キャリア意識の発達、グローバル人材に求められる素養という観点から成果と課題を考察した。全学教育科目（2021 年度春学期 特別講義 アジア現代事情 I ）の受講生は、Global Communication for Future Leaders プログラムを通して、「シティズンシップを育むトピックで物事を多角的・多面的に捉えられるスキルを伸ばし、英語でのコミュニケーション能力を高めることで、将来グローバル人材として活躍する際に必要とされる力を身に付ける」という教育目標を達成することができた。留学には現地渡航しなくては達成できない教育効果があるものとは考えるが、双方向遠隔教育プログラムでも、英語でのコミュニケーション能力の向上、視野を広げること、文化理解、グローバル人材に求められる素養の育成といった点において一定の成果を出し得ることが確認できた。中でも「文化理解」に関して、現地に渡航しなくてもオーストラリアの文化や社会への学生の興味を引き出すことができ、日本の歴史文化を理解することも重要だと学生に認識させることまで可能であると明らかになったことは、ポストコロナ時代のオンライン留学の可能性を考える上で参考になるだろう。

本稿は Global Communication for Future Leaders に参加した学生の意識調査に限定した報告・資料提供であるため、今後、当プログラムや他の双方向遠隔教育プログラムに参加した学生の個々に焦点を当てて分析し、どのような学生にオンライン留学が適しているのかを丁寧に検証する必要がある。また渡航を伴う短期留学プログラムの成果と当調査結果を比較することも、短期留学プログラムの中で現地渡航に代えて双方向遠隔教育で実施可能なのはどの部分なのかを考える上で必要となる。ポストコロナ時代の学生により充実した留学プログラム提供できるよう調査研究を継続していきたい。

注

1) 名古屋大学の協定校であるモナシュ大学の傘下にあり、様々な大学準備コースや短期研修を提供している機関

参考文献

岩城奈巳、2012、「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『名古屋大学留学生センター紀要』10: 23-29。

岩城奈巳・巽洋子、2021、「COVID-19 による学生の留学に対する意識変化－大学生への調査を通して－」『名古屋高等教育研究』21: 187-206。

清藤隆春・橋本智、2020、「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定：コロナ禍でのグローバル人材育成の試み」『徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報』12-21。

宮武香織、2021、「新型コロナウイルス禍での遠隔授業におけるグローバル体験の効果と可能性について」『九州国際大学国際・経済論集』7: 41-54。

文部科学省、2011、グローバル人材育成推進会議中間まとめ。(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/__icsFiles/afieldfile/2011/08/09/1309212_07_1.pdf, 2020.3.31)

下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実、2009、「大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発」『キャリアデザイン研究』5: 127-39。

田口真奈・鈴木健雄、2021、「オンライン授業・ハイブリッド型授業の質保証に向けて－京都大学の授業支援を事例に－」『名古屋高等教育研究』21: 49-75。

山内祐平、2021、「コロナ禍下における大学教育のオンライン化と質保証」『名古屋高等教育研究』21: 5-25。

Witze, A., 2020, “Universities Will Never Be the Same After the Coronavirus Crisis”, *Nature*, 582: 162-4.

附属資料 1　Global Communication for Future Leaders シラバス

Intermediate Level （IELTS 4.0-5.0 程度）	The focus is on developing fluency in English to enable engagement in everyday topics such as culture and global business. There is a greater focus on developing English language skills than the advanced level. ・Stories and Opinions：Skills for telling stories and sharing opinions about current affairs. Language for engaging in an online environment. ・Everyday Conversation：Communication skills for everyday conversations, including likes and dislikes, stopping and starting a discussion, and polite disagreements. ・Culture：Introduction to cultural differences, including non-verbal communication, Develop familiarity with key concepts in cross-cultural awareness. ・Global Careers：Business English skills for communicating in a more formal context. Spoken interaction in the workplace, professional presentations, and cross-cultural awareness in a business context.
Advanced Level （IELTS 5.5-6.5 程度）	There is a greater focus on improving English literacy, and students will explore a wider range of topics, e.g. urbanisation, digital technology, and Sustainable Development Goals (SDGs). ・Media and Communication：The nature of media and digital information in the 21st century. Importance of digital devices in a global media ecology. ・Urbanisation and Environmental Problems：Innovation and ingenuity in the face of complex problems. Technological improvements to urban environments. ・Sustainable Development：Fostering a sustainable mindset on complex issues. Individual, corporate and government responsibility in multinational society. ・Global Workplace：Advanced Business English skills for communicating with various internal and external stakeholders. Building own personal brand to advance their professional standing and career.

出所：Monash College GCFL_2021_flyer

附属資料２　アンケート調査 質問項目および回答方法

プログラム開始前アンケート

全 25 問（選択式 24 問、記述式 1 問）

【pQ1】プログラムへの志望動機

pQ1-1：『あなたが海外研修プログラム全般に求めることは何ですか（複数選択可）』
〔回答選択肢：1.専門知識を深めること、2.語学力の向上、3.参加学生との交流、4.現地の文化を体験すること、5.視野を広げること、6.上記以外〕

pQ1-2：上記の事項の中から「Global Communication for Future Leaders」に参加するにあたり、最も優先度が高かった項目を 1 つ選んでください。

pQ1-3：その理由を具体的に教えてください。

【pQ2】興味のある領域

『あなたは以下の各領域に、どの程度興味を抱いていますか』
「グローバルキャリア就職」「企業戦略」「国際交流」「異文化コミュニケーション」「オーストラリア社会」「オーストラリア文化」「外国語」「海外生活」の 9 項目に対し、5 件法〔とても興味がある／興味がある／どちらとも言えない／あまり興味がない／全く興味がない〕での回答。

【pQ3】キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）（下村・八幡・梅崎・田澤 2009）

『あなたは現在以下のようなことが、どの程度できていると感じますか』

1. 将来のビジョンを明確にする
2. 学外の様々な活動に熱心に取り組む
3. 将来の夢をハッキリさせ目標を立てる
4. 尊敬する人に会える場に積極的に参加する
5. 将来、具体的に何をやりたいかを見つける
6. 人生に役立つスキルを身につける
7. 将来に備えて準備する
8. 様々な人に出会い人脈を広げる
9. 将来のことを調べて考える
10. 何事にも積極的に取り組む
11. 自分が本当にやりたいことを見つける
12. 様々な視点から物事を見られる人間になる

上記 12 項目に対して、〔そう思う／ややそう思う／どちらとも言えない／あまりそう思わない／全くそう思わない〕の 5 つから選択して回答。

【pQ4】海外滞在の希望有無

『チャンスがあれば海外滞在したいと思いますか（複数選択可）』
〔回答選択肢：将来的に海外勤務を視野に入れたい、海外大学院進学を視野に入れたい、交換留学（半年～1 年）に興味あり、渡航する短期研修に興味あり、旅行であれば、海外滞在に興味なし〕

プログラム修了後アンケート

全 40 問（すべて選択式）

【fQ1】プログラムへの満足度

『Global Communication for Future Leaders」に参加して、最も満足度が高かった項目を 1 つ選んでください』

〔回答選択肢：1.専門知識を深めること、2.語学力の向上、3.参加学生との交流、4.現地の文化を体験すること、5.視野を広げること、6.上記以外〕

【fQ2】興味のある領域

（プログラム開始前アンケート【pQ2】と同様）

【fQ3】キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）（下村・八幡・梅崎・田澤 2009）

（プログラム開始前アンケート【pQ3】と同様）

【fQ4】海外滞在の希望有無

（プログラム開始前アンケート【pQ4】と同様）

【fQ5】学生自身による研修成果の振りかえり

『Global Communication for Future Leaders 研修を終えて、あなたの気持ちに最も近いものを選択してください』

① 今まで関心がなかった職種に興味が沸いてきた
② 今後の就職活動に対する意欲が沸いた
③ 社会人としての心構えを学ぶことができた
④ 社会人として働くことへの不安がなくなった
⑤ 海外を舞台に活躍したいと感じた
⑥ 海外で働くことの難しさを実感した
⑦ 社会人と学生との考え方の違いを実感できた
⑧ 自分自身の強みや弱みを知ることができた
⑨ 英語でコミュニケーションを取る楽しさを実感した
⑩ もっと語学を勉強する必要があると感じた
⑪ 異文化に触れ、視野が広がった
⑫ 積極性が重要であると感じた
⑬ チャレンジ精神が重要であると感じた
⑭ 精神的にタフであることが重要であると感じた
⑮ リーダーシップが重要であると感じた
⑯ 幅広い教養が必要であると感じた
⑰ 自分の母国の歴史や文化について、きちんと理解することが重要であると感じた

上記①～⑰の各項目に対して〔強くそう思う／ややそう思う／あまりそう思わない／全くそう思わない〕から選択して回答。